

いすゞ自動車株式会社 JNX活用事例インタビュー

case01

JNXを中心とした蓄積交換システムXion(ザイオン)の提供開始より、本格的にJNXを活用。
現在では約200社とのサプライヤーとJNXにて受発注を電子化。



本社は、品川にある大森ベルポート

いすゞ自動車株式会社 グローバル業務・IT推進部グローバルITインフラグループGL 早水宏夫氏に、
JNXの導入経緯と導入効果、JNXに期待することについて伺いました。

早期よりEDI化を行い、幅広い取引先との効率化を実現

いすゞ自動車の自社製品や仕入先の特徴とEDIの導入背景などを教えてください。

いすゞ自動車は、乗用車生産を93年に中止したこともあり、国内においては、商用車、ディーゼルエンジンを中心とした生産を、現在を行っています。サプライヤ殿も特に偏りを持たず、幅広い範囲からお取引させていただいています。

EDIは、比較的早期(1980年代)から、独自の通信方式によるIV-NETというEDIの送受信システムを運用していました。NMS(現IE/EX)[*1]も1980年代末より利用し始め、サプライヤ殿と「Computer to Computer」ベースでの受発注処理を行っています。

1990年代よりTCP/IPベースに切り替えたID-COM[*2]とIE/EXも併用を経て、2004年よりJNXを中心としたXION(ザイオン) [*3]を運用開始しました。同時にEDIFACT[*4]もサポートできるようになり、現時点(17年6月時点)では約7割のサプライヤ殿との受発注を電子化していて、JNXを利用しては約200社のサプライヤ殿と電子商取引を行っています。



2017年の主ないすゞ自動車の商品ラインナップ。
これら商品の部品受発注情報や設計情報がJNXを通して行われている。

JNXがはじまり、サプライヤーとの通信をより効率的に

JNX導入の背景を教えてください。



いすゞ自動車商用車の原点「ウーズレーCP型」

■ いつJNXを導入されましたか

2000年サービス開始時から、JNXに加入しています。CSP[*5]は、3社より提案をいただき、トヨタデジタルクルーズ殿としました。

■ 導入のきっかけは何ですか

OEMとして、自動車業界の標準ネットワークへの参加に意義を感じていていたからです。自社の限られた範囲のネットワーク接続と違って、前項の特徴で述べたとおり、様々なサプライヤー殿との通信をより効率的に展開できる意図があったためです。

■ JNXの導入あるいは移行はスムーズでしたか

購買部門主催でサプライヤー殿への説明会を、CSP殿の自社サービス説明も含み行いました。

JNX加入以前より、ダイヤルアップもしくは専用線ながらも、TCP/IPベースでの通信に切り替えを行っていたので、ネットワークの変更負荷は比較的小さく、混乱も特に無かったと思います。

サプライヤーとの情報交換だけではなく、自動車関連の社会システムでも利用

現在のJNX利用の範囲を教えてください。

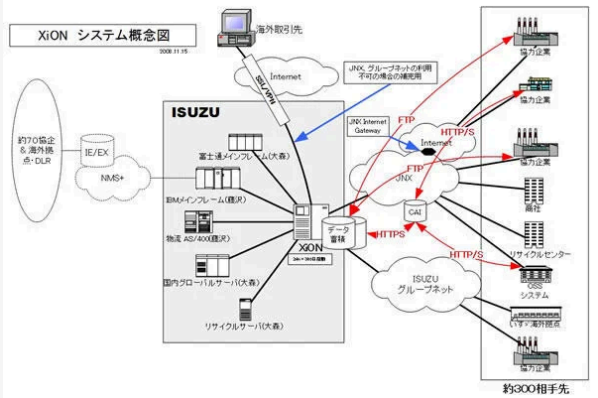
約200社のお取引先との通信を、CAI(自動車業界共通基盤)利用も含め展開しています。またサプライヤー殿とのデータ交換に限らず、高いセキュリティ確保するためにリサイクルセンター[*6]やOSS[*7]、リース会社との接続等にも利用しています。



グローバル業務・IT推進部内

XiON(データ蓄積交換システム)を中心とし、JNXを活用するNW構成

現状のいすゞ自動車のNW構成は？



いすゞ自動車 NW構成概要

いすゞ自動車では、外部企業の方とのデータ蓄積交換を行うためにXiONを利用し、ネットワークではJNXを中心に、Internet、いすゞグループネット、いすゞOAネットと接続し、外部企業の利用用途に合わせて、ネットワークを選択していただいています。

XiONとは？

XiONは、どのようなデータ蓄積交換システムなのか？

まず、XiONの名称ですが、eXtended isuzu Openminded Networkの略になります。

XiONの主要機能は、下記になります。

- 1. 各種ファイル転送プロトコルに対応しています。(FTP/CAI/HTTPに対応、HULFTは社内のみ)
- 2. 様々なデータ送受信要求に対応する、ファイル分割、ファイル集約、レプリケーション、配信先変更等のファイルハンドリングに対応し、またコード変換機能を始めとし「DELFOR」「DELJIT」を初めとしたEDI変換や各種XML等のトランスレーションにも対応しています。
- 3. 確実なファイルの収受を行うために送受信対象ファイルの送受信履歴管理、二重配信防止や再受信対応等の管理、ファイル転送プロセスの監視も行っています。



JNXの効果は、相手先のネットワーク接続に関するサポート負荷の減免と通信に関するセキュリティ維持・監視コストの低減。今後は、通信環境のコア技術の進化とともに、新しいベースでのサービス展開を期待。

JNXの導入効果と今後に期待することを教えてください。

JNXの導入効果を教えてください

JNX導入は、自社ネットワーク運用に比べ、相手先のネットワーク接続に関してサポート負荷を減免できます。さらに、インターネットと比較し、通信に関するセキュリティ維持のコスト、監視コストを低く抑えることができます。

JNXに期待することは何ですか

サービス開始後ほぼ17年が経過しようとしており、インターネット普及、モバイル通信を含めた通信環境やコア技術が大きく変貌しています。JNXは、単に通信の針金の位置に拘泥することなく、新しいベースでのサービス展開が必要な時期にさしかかっていると思います。日本の自動車業界のビジネスルール、ニーズに則した一歩踏み込んだサービスを展開していくことが必要であると考えています。



取材後記

いすゞ自動車の受発注が、比較的早い時期からEDI化され、JNXの誕生とともに、さらに効率的に電子商取引が行われたと思います。

いすゞ自動車さんのコメントにもあるように、時代にあう新しいベースでのサービス展開を自動車業界に提案・提供していかなければいけないと感じました

*1 NMS(現IE/EX)：EDI外部商用サービス
*2 ID-COM：旧いすゞ自動車データ蓄積交換システム
*3 XiON：いすゞ自動車が提供する内データ蓄積交換システム
*4 EDIFACT：行政、商業及び輸送のための電子的データ交換
*5 CSP：JNXセンターが認定しているサービスプロバイダー
*6 リサイクルセンター：自動車リサイクルシステム
*7 OSS：自動車保有関係手続きのワンストップサービス



今後のJNXに期待しています

いすゞ自動車株式会社 グローバル業務・IT推進部 グローバルITインフラグループGL
早水 宏夫氏

取材日：2017年7月
文中に記載している情報は、取材時点の内容です。

設立	1937年4月(創業：1916年)	従業員数	連結：33,631人 単独：8,111人(2017年3月末)
----	-------------------	------	-----------------------------------



資本金

406.44億円(2017年3月末現在)

売上高

連結：1,953,186百万円
単独：1,065,886百万円
(2016年4月～2017年3月)

主要製品

大型・中型・小型トラック、
バス、自動車用ディーゼルエ
ンジン、産業用ディーゼルエ
ンジン

URL

<http://www.isuzu.co.jp/index.html>